

札幌自由が丘学園スタッフのエッセイ集 (2005.11.25 ~ 12.23 NO61-75)

| | | | |
|-----|--------------------|-------|------------|
| 6 1 | 「手紙」 その2 | 畑中紀世彦 | 2005.11.25 |
| 6 2 | ホットドッグの店 リサとケント | 新藤 理 | 2005.11.26 |
| 6 3 | 「仕事と趣味と」 | 金澤拓紀 | 2005.11.29 |
| 6 4 | ウエルカム・バースデー・パーティー | 芳賀 慈 | 2005.11.30 |
| 6 5 | 「再会」(その1) | 杉野建史 | 2005.12.03 |
| 6 6 | 「再会」(その2) | 杉野建史 | 2005.12.05 |
| 6 7 | 「クリオネ」が消える! | 亀貝一義 | 2005.12.06 |
| 6 8 | 「再会」(その3) | 杉野建史 | 2005.12.07 |
| 6 9 | 「手紙」 その3 | 畑中紀世彦 | 2005.12.08 |
| 7 0 | 「いつでも風の子」 | 田房絢子 | 2005.12.12 |
| 7 1 | 2005 年をふり返る (ワケあり) | 新藤 理 | 2005.12.14 |
| 7 2 | 「伝えたいもの」 | 金澤拓紀 | 2005.12.15 |
| 7 3 | カディスの赤いいちご | 芳賀 慈 | 2005.12.16 |
| 7 4 | 体験授業 | 亀貝一義 | 2005.12.18 |
| 7 5 | 「コスタリダ」 | 畑中紀世彦 | 2005.12.23 |

6 1 「手紙」 その2

畑中紀世彦

2005.11.25

歓(新入生歓迎会)の練習は次に自己紹介の練習を行う。宴会場の上座に先生や先輩達が座っているので、下座側から上座に向かって宴会場の幅に合わせた何列かの横隊をつくる。部長が号令をかけると男女一斉に整列、そして新入生代表(バスケット部が一番背が高い男子)が「(礼)オス!(礼)失礼します! 只今より! 平成 年度! N大学! S学部! 体育部連盟! 籠球部! 新入生自己紹介を始めさせていただきます! (礼)オス!(礼)失礼します!」と開始の挨拶をする。そして男子から背の順に自己紹介をする新入生が一步前に出て、「オス!(礼)失礼します! 自分は 高等学校出身、××学科、 年、 中 彦であります! どうぞ宜しく!おねがいたします! (礼)オス!(礼)失礼します!」と、新入生全員が行う。自己紹介は宴会が開始されてから30分後に始まるのだが、それまでに鱈腹ビールを飲まされている。当日は酔っぱらった状態だがキビキビと行わなければならないので、毎日の厳しい練習で体にたたき込まれるのだ。

その次は校歌の練習。N大学では、大きな宴会の最後に校歌を熱唱するのが慣例だ。しかも振り付きで。右手の拳を高く上げ、その拳を左のモモに振り下ろす。この動作を延々と繰り返しながらの校歌を熱唱するのだ。その姿はまさに軍隊。このような軍国主義思想が大学の体育会では未だに堂々と受け継がれており、しかもそれが国の教育機関で最高だというのだから頭が痛い(笑)。

最後の練習は礼儀作法。ビール瓶の持ち方、注ぎ方、注がれ方、タバコの火の付け方、トイレから出てくる先輩へのハンカチの出し方などなど。特に練習が必要なのはタバコの火の付け方で、先輩がタバコをくわえると直ぐに準備していたマッチをポケットから取り出し、両手を後ろに回して背中中で火

をつける。それを消さないように両手を添えてタバコの前まで運ぶのだ。そんなくだらない練習も、部活の仲間と割り切ってワイワイとやると意外と面白かったのだ。こんなことでも楽しめたのだなあと思えば、振り返ると、当時を思い出してニヤニヤしてしまう。

かくして、桜の木の下、桜咲く中で始まった練習も、桜散り新緑の頃ようやく本番を迎えるのだった。

つづく

62 ホットドッグの店 リサとケント

新藤 理

2005.11.26

先日、フリースクール部の何名かの生徒たちに「命について考える」ことをテーマに課題を出す機会があった。気持ちの面でも分量の面でも、簡単な内容にはできない課題だった。迷ったあげく生徒に課したのは、文章の書き写し。課題文は、あるホットドッグ屋さんへのインタビューだった。

「リサとケント」というその店の名前は、お店を営む井上恭至・智恵子さん夫妻の子どもたちの名前をとったものだ。智恵子さんがTVドラマを見て泣くと、ティッシュを持ってきて涙をふいてくれたという、優しい二人の子たち。その命は、今から20年前の8月12日、日航機墜落事故によってうばわれた。

「生きていてもかいたような気持ちでした」という恭至さんが、それでもある時、くじけてはならないと思い直して始めたのが「リサとケント」だった。亡くなった自分の娘・息子と同世代の子どもたちのためにホットドッグを焼き、できる限り子どもたちの相手をしながら生きていくことが二人への供養になる、というのだ。

店を訪れ、家のことや学校のことを話し、時には店の手伝いまでしてくれるたくさんの子どもたちを、井上さん夫妻は本当に可愛がっている。だが、「今もね、こうして笑顔は見せていますが、心から笑うということはありませんね」。インタビューは、「もう泣いてもどうしても子どもたちは帰ってきません。今は、現在生きている子どもたちの話し相手の店として、女房とふたり、ほそぼそとつづけていこうと思います」という恭至さんの言葉で終わる。

この話に生半可なコメントなどすべきではないだろうし、実際、「ほそぼそと」それでも生き続ける井上さん夫妻の生を前に、あらゆる言葉はうばわれてしまう思いがする。ただ、一方通行の思いを言えば、井上さん夫婦、そして理沙ちゃん・健人くんとの出会いに感謝したいと思った。何を祈るのかもわからないまま、ただ何か祈るような気持ちになった。そして、その思いを生徒たちにも共有してほしかった。決してあってはならなかった事故を通じてではあるけど、このインタビューは確かに、「命の大切さ」を途方もない強さで知らせてくれる。

言うまでもなく生徒たちは未熟で、それゆえ他人や自分を粗末に扱ってしまうこともある。でも、そのことが時に、決して失ってはならないものを、大切さに気づかぬうちに取り返せなくする結果になってしまうのだ。課題に添えられた生徒たちの感想がどれも真剣だったことにずいぶん安心したが、その思いをどれくらい大切に胸に留めておいてくれるだろうか。

このインタビューは、フリースクール部の本棚に並んだ理論社刊の「わたしの仕事 心を語る229名の人びと」というシリーズに収められている。様々な職業の人びとへのインタビュー集で、「活字

や映像をつくる人」「味を求める人」など職業のジャンルごとに巻が分かれている。

「ホットドッグ店」の井上さんへのインタビューが収められたのは、「第3巻・生きるエネルギーを売る人」。この巻になぜホットドッグの店が...? と、何もわからずに読み始めたのが出会った。裏表紙には、かわいらしいホットドッグのイラストが一つ、置かれている。

63 「仕事と趣味と」 金澤拓紀

2005.11.29

2年前まで夕張には寄宿型の自由が丘学園があり、私はそこで約3年間スタッフをしていた。最初に校舎として利用していた旧鹿ノ谷小学校は今でも残っているのだが、夕張を撤退するときを利用して元家具屋の校舎はこの春に、元旅館の寄宿舎はこの秋に取り壊されてしまい、残っているのは思い出だけとなってしまった。

高校を卒業するまで暮らしていた青森が、これまで最も長く過ごした「マチ」であるという私の歴史はまだしばらく変わりそうもないのだが、たった3年間過ごしただけの夕張の方が、なぜか「マチ」としての印象は強烈であるように感じられる。

高校までを過ごした青森、大学時代を過ごした横須賀にもそれぞれの思い出があり、少しの間だけ暮らしたことがある広島江田島や京都の舞鶴にも未だにお付き合いを続けさせていただいている方々はいるのだが、これほどまでに「マチ」というものを意識した経験は、夕張以外ではなかったように思う。

炭坑町として昭和の激動時代を支えてきた夕張市は、昭和35年のピーク時に比べると人口がおよそ8分の1(約13,000人)にまで減少してしまった過疎と高齢化が進む「マチ」である。初めて夕張を訪れる前に私がこの「マチ」について知っていたことといえば、全国的にも名が知られている「夕張メロン」くらいであった。

たまたま髪を切りに行った床屋さんの紹介で、あるミニバレーボールチームの練習に参加するようになり、そこで出会ったチームメイトの縁で、「夕張青年会議所」という団体に所属するようになった。また、寄宿舎の向かいにあった紳士服屋のご主人に誘われて、盆踊りやお祭りなど、町内会の催し物準備にもよく顔を出すようになった。

「ゆうばり映画祭」への参加や、「市長選公開討論会」の開催など、色々な活動に首を突っ込んでいるうちに、市内で車を走らせていても知っている人に出くわさないことがないくらいにまで顔馴染みが増えていったのだが、なぜそんなことをしていたのかといえば、自分という人間を通じて少しでも多くの人たちに自由が丘の活動を理解してもらいたいという思いがあったからに他ならない。

では私自身がそれを「仕事」として捉えていたのかというと、「仕事半分、趣味半分」というのが正直なところであった。そうした活動が自由が丘の支援に繋がることも少なくともはなかったのだが、それにも増して自分自身に大きく跳ね返ってくるものがあることを感じていたからだ。婚姻届を出す際は、紳士服屋のご夫妻に証人となっていただいた。披露宴の予定がないのを知って、ミニバレーや青年会議所、映画祭応援団の仲間たちが結婚パーティを開いてくれた。

「応援」「友情」「絆」。どういった表現が相応しいのかはよく分からないが、そうした人たちとの繋がりを通して、「マチ」やそこに住む人たちのことを考えるようになったことだけは確かだと思う。

今でもたまに夕張へ出かけていくことがあるのだが、「仕事」のためでなくなったことだけは間違いない。

6 4 ウェルカム・バースデー・パーティー 芳賀 慈

2005.11.30

月に一度のウェルカム。フリースクールに新しい仲間が入学したり、誕生日の人がいる月にはみんなで料理を作って食べるお楽しみ会のような日のこと。28日は、4人の仲間を迎え、2人の誕生日を祝うウェルカムの日だった。

生徒たちは3つのグループに分かれて担当しているから、3か月に一度、調理の当番が来ることになる。今回は中でも男所帯のグループが当たっていた。人数はたくさんいるが、調理の経験は「？」な気配。これは男の料理になるねと言いながら、紅一点の女の子が、四苦八苦しなメニューを決める。焼きうどん、ふかしいも、じゃがバター、お味噌汁。買い物のメモを作っていたら、「手伝うよ」と女の子がもう1人入ってきた。

当日「肉、切らないの？そのまま入れるの？」「玉ねぎが入ってるのに、長ねぎも入れるの？」と言うのは男の子。「いいの、いいの。全部入れてしまえ」と言うのが女の子。かくて女の子作「男の料理」が完成。そしてそれはもちろん、おいしいおいしいとほとんどきれいに平らげられたのだった。

午後からは舞台役者で学園講師歴7年になる中神さんのひとり芝居「蜘蛛の糸」と読み聞かせ「おおきなおおきな木」。こちらも見ごたえ、聞きごたえたっぷりの情感溢れるひとときで、会場は大きな拍手に包まれた。舞台終了後は中神さんの役者人生について質問タイムをとり、「収入は？」「どうして役者に？」「せりふを覚える秘訣は？」など一つひとついねいに答えてくれる姿が。興味が中央に向いていたころや、数ある舞台経験でのエピソードなどを通して、全ての経験が今につながっているのだという言葉に、真剣に聞き入る生徒たちだった。

6 5 「再会」(その1) 杉野建史

2005.12.03

私は現在教師をしている。ちょっと昔、出会った教師はこんな教師(私のような)だったのだろうか。教師になったら、お世話になった先生方に聞きたいことがあった。「あの時、どんな思いで私にぶつかってくれたのですか」。

先日ある中学校を訪問した。その学校には私が20年前に大変お世話になった先生がつとめている。訪問する前からわかっていたので、是非この機会にお会いして挨拶したいと考えていた。校長室に通され用事が済んだ後その先生(N先生)を呼んでいただいた。職員室にいなかったなので、わざわざ校内放送をかけていただいた。数分後、校長室から遠い側にある職員室の戸を開けてN先生が入ってきた。勿論、私は一目見てわかったのだが「自分のことを覚えていてくれるだろうか」「見てもわからないだろうな」「自己紹介をしても思い出してもらえなかったら…」と心の中は心配で一杯だった。

N先生は私が深く礼をして顔を上げた瞬間「よおー杉野じゃないか。杉野じゃないか。」と一目で私をわかってくれた。感動した。握手をした。力強く握り替えされた手に20年前は何度“指導”されたことだろう。「今更、なに坊主になっているのよ」と笑いなが話しかけるその声は張りがあり声量があり、20年前と変わっていなかった。

1980年頃、札幌市内の中学校は“荒れ”ていた。「校内暴力」「教師への暴力」「学校間のけんか」

など新聞をにぎわせていた。今では考えられないような“荒れ”た学校に通っていた。子どもの数が増加している時代で1学年12クラス。1500名を超える生徒数だった。教室が足りずプレハブを臨時に設置して教室数を間に合わせるほどだった。人数も多いし、血気盛んな生徒は多いし、中学校が落ち着かなかった。小学生の頃は「中学校へ近づくな」と指導されていた。私が1年生の時の卒業式の際に卒業生代表挨拶をした先輩の言葉を今も覚えている。「学校で落ち着いて勉強した記憶はない。毎日なる火災報知器。消化器で真っ白になった廊下。至る所で割れている窓ガラス。走り回り学校にいない先生方。ただただ荒れが収まるのを必死に待っていた…」確かに激動の中学生時代だった。

初めてあったときのN先生の年齢と、現在の私の年齢が一緒であると言われて非常に驚いた。校長先生が僕の様子を見て「この教師にこの生徒あり。今の先生(私のこと)の雰囲気はN先生に似ていますよ」とおっしゃった。「そうかもしれない!？」と思った。
私は教師なのだ。

私が忘れていたことを次々と話し始めた。中学生時代の様々な悪事。「でも、あの時代はおもしろかったよな。あんなこと考えて、しでかす中学生はいなかった。今もそんなやつは見たことがない。なにせパワーがあった」校長先生は笑いながら私を見ていた。

66 「再会」(その2) 杉野建史 2005.12.05

懐かしい人と会い久しぶりに話すことができた。昔やらかした悪事のことがたくさん出てきて、汗をかいた。

先日、20年ぶりにあった先生に中学生時代の様々な悪事を暴露された。そのときは中学校訪問中でH中氏も一緒だった。中学生時代、私の母校は荒れていて「学校再生・再建」のために当時の先生方、保護者の方々、地域の方々が私たちのために尽力してくださった。再会したN先生は「いろいろあったけど、でもあの時代はおもしろかった。あんなことしでかす奴はいなかった。今もそんな奴いない。なにせパワーがあった」と笑いながら話してくださった。

忘れていたことが次々と思い出された。隣にH中氏がいるのだが、懐かしい気持ちで気持ちが一杯になりしばし昔話を楽しんだ。

真冬、小高く積もった雪山めがけて4階の窓から飛び降りたこと。危険極まりない自殺行為である。勿論こってり怒られた。当然のことである。ある先生と唾み合ったこと。廊下で会うたびお互いに譲らず胸をつきあわせてにらみ合い罵りあったこと。本当に生意気だった。校則のことで生活指導の先生とぶつかり胸ぐらをつかみ合い喧嘩したこと。周りの先生に止められても向かっていた。血の気が多すぎた。そのほかにも個々には書くことができないたくさんの悪事が思い出された。単なる“不良”とは違って(筈である)。

でも未熟だった私なりの理屈がきちんとあったことをはっきりと覚えているし、その理屈のいくつかは今でも正しいと思えている。ただ、礼儀を欠いた行為をしてしまったこと。時に暴力で訴えたこと。これらの行為は間違いである。なんだかわからないが、先生に歯向かっていた。今の自分の立場になって考えると「かなり手をやく生徒」だったことは間違いはない。

その生徒が教師になっているのだから面白い。と、自分では思う。今の自分はいつ頃形成されたのだろうか。あんなに唾み合っていた相手の教師になることは自分に矛盾しないのだろうか。とは、みじ

んも思わずに教師になり子どもと毎日を過ごしている。

この前、クラスの子どもに「いつ頃（何歳頃）自分をもっとも成長すると思いますか。また成長したいですか」と聞いてみた。面白い答えがあった。

67 「クリオネ」が消える！ 亀貝一義 2005.12.06

「クリオネ」、それは「流水の天使」「流水の妖精」などとよばれている体長2～3センチの巻き貝の一種である。冬になると流水とともにオホーツク海沿岸にやって来る。泳ぐ姿が翼を広げた天使を思わせる。

11月28日の北海道新聞夕刊の記事によると環境汚染が進む中で、50年後にはこの流水の天使のクリオネは絶滅する...、という。

このクリオネの学名（和名）は「ハダカカメガイ」。私は上の記事を見て、「人ごとでない」の気持ちをもった。

私の周辺の一族での男子はウチの息子を含めて3人。女の子ばかりで“跡を継ぐ”男子はいない。だからカメガイは50年もしないうちに（多分）消えるだろう。

家名が消えることなどは大して問題ではない。しかしハダカカメガイが消えると言うことは人類全体への重大な問題につながる。そう思いながら、私は心を痛めている？

資料は写真を含めて Encarta Encyclopedia05 年版から。

68 「再会」(その3) 杉野建史 2005.12.07

「いつ頃（何歳頃）自分をもっとも成長すると思いますか。また成長したいですか」と聞かれたらどのように答えますか。

私がクラスの子どもたちにこの問いを投げかけた理由は「今の自分（教師としての考え方、判断や行動の基礎となるコアの部分）はいつ頃形成されたのだろうか。」という自分に対する疑問からである。

20年ぶりにお逢いしたN先生が私の中学時代のことを思い出して「いろいろあったけど、でもあの時代はおもしろかった。あんなことしでかす奴はいなかった。今もそんな奴いない。なにせパワーがあった」と言われていたことを後になって考え直すと、中学時代の私のいろいろな体験が、自分のコアの部分をつくっているのだらうと思う。やりたいことをさせてもらったと思う。当時、血気盛んで生意気なガキの思いを受け止めてくれる先生方や保護者、地域の方々に支えられていたことは間違いない。

中学生の時、私は生徒会役員を2度経験した（想像できないでしょうが...）。皆さんが想像する「超真面目」の生徒会とは全く違う集団を組織した。幼なじみに声をかけ、「生徒会の役職全てを俺たちで占拠しよう」ということにした。計画はほぼ成功し役職のほとんどを幼なじみで固めることができた。目的は1つ「自分たちの思い通りにあらゆる生徒会活動を行うため」だった。だから、誰がどの役職でも良かった。気の合う仲間ですべて先生方を丸め込み、上手に騙し（勿論先生方は騙されたふりをしてくれたことは言うまでもない。）自分たちの天下にしようと思ったのだ。役員任期中の

最大の行事である学校祭の取り組みは半年前から始めた。“ 中学校学園祭ここにあり！！ ”と言わしめたかった。その当時のことをN先生は「ワヤなことやったよな」と言っていた。「ワヤ」の意味は“めちゃくちゃ”ではなく“めちゃくちゃ凄いことをした”の意味である。せまい生徒会室が生徒のたまり場になった。学年に関係なく、誰でも遊びに来たし、そこで人間関係を広げる生徒が少なくなかった。

たかだか30数年の人生経験であるが、人には「精一杯やった。一生懸命に取り組んだ。やり遂げた」と思える時期（青春時代）があると思う。そういう時期を過ごした経験のある子どもは、大人になったときにそのことを振り返ると「自分の成長」を強く感じるができるはずである。だから、心や頭が柔軟なときにたくさんの経験を積むことが本当に大切であると思う。子どもに対して機会があるごとに「いろんな事に取り組もう。挑戦してみよう。」と話す。

「いまを生きる」ことが大切なのだ。

69 「手紙」 その3 畑中紀世彦 2005.12.08

かくして新歓は本番当日を迎えた。最後の練習を学校で行い、正装（黒の学ランに校章を付け、黒の革靴、黒の靴下、黒のベルト、白いワイシャツ、髪は額が見えるように上げる）に着替え、白いハンカチ、マッチなど持ち物も新入生みんなを確認し合った。場所はとあるカニ料理屋で、人混みの中では目立つので、大路地から一本入ったところにある店が毎年使われる。宴会の一時間前に集合し、店の前に整列した。もう誰も一言も話せない緊張感の中、関係者らしき人が通過すると揃って挨拶をする。「オス！失礼します！」ただ道を歩いているだけでそんな挨拶を大声でかけられたら当然ビックリする。その相手の反応で関係者かどうかが判るのだが、我々は挨拶以外に何もしてはいけない。列を乱すことは一切許されないのだ。拭えない汗が額や首筋、背中を流れていく、そんな緊張感を今でも覚えている。

ここからが悲惨な物語の始まりだ。参加者が全員そろると、いよいよ宴会は始まった。先輩達から注がれるお酒は、良いと言われるまで全て一気で飲み干さなければならない。事前に新入生同士で何杯飲んだか数えようと話していたけれど、宴会が開始してそれほど時間が経たないうちに40杯ほどを飲んだ辺りで数えることはできなくなっていた。そしてそれから間もなく、1ヶ月ものあいだ練習をしてきた自己紹介は始まった。きちんとこなせたとはいえるが、その後も浴びるほどビールを飲まされ、最後の校歌をきちんとできたのかどうかは記憶にはない。

そんな状態でも二次会の宴は強制参加。その二次会での姿はとても活字にはできません、皆様のご想像にお任せしましょう。

地獄の現場からついに帰路へ向かうときがきた。電車で乗り継ぎ2時間の予定、終電に乗り込んだ。満員電車の人混みに流されて、具合も悪くなり、なんと途中で下車してしまった。それがどこの駅だったのかは未だに分からない。日が昇るまでポロポロになって歩き続け、たどり着いた駅は聞いたこともない駅だった。

新歓はそんな苦い思い出だ。あのときのビールのように。

大学生のお酒による事故は昔からよく報道されている。大学2年生まではそのほとんどが未成年だが、それにも関わらず学生服を着た未成年が巷で堂々と大騒ぎの宴会をしても、とがめられたりはしなか

った。むしろ学校行事として先生達も一緒に参加しているくらいだった。そこでは単純に部活をやりたいだけの学生もお酒を強要される。部活に所属するには必至のことだった。体罰もあった。(このような体質を変えたくても変えられない理由があったのだが、長くなるため略)。あの頃を振り返れば危険な出来事はたくさんある。たまたま大きな事件や事故にはならなっただけだろう。

大学を卒業して7年半、未だに送られてくる行事の知らせ、その手紙を見る度にあの頃を思い出す。文面を読み、会場の名前が変わっていないところをみると今でもまだ続いているのだろうか。あの頃とは変わっていて欲しいなあ。母校、我が部を愛するが故に。

70 「いつでも風の子」 田房 絢子 2005.12.12

つい先日から風邪をひいている。症状は咳とちょっとのだるさ。重症ではないけれど、やっぱり病気になると気が重い。

健康は普段あまり意識できるものではなくて、ちょっと具合が悪くなったときに痛感する。「いつもは気付かないけど、元気であるっていうのは素晴らしいことなんだなあ」と思いながら、早く治れ早く治れと自分を励ましている。でも元気になったらなっただ、またその大切さを忘れてしまいがちなんだけど・・・。

インフルエンザ大流行にでもならない限り、予防策はあまり考えていなかった。手洗い・うがいなんかは風邪をひいたら、ちょっとするだけ。でもここ数年は変わってきた。冬場は特に風邪をひかなくても、予防としてうがいをするようになった(手を洗うのはもちろんだけど)。この感覚は以前にはなかったもの。病気を治すためになにかをするという行為は、その効果が徐々に出てくるからわかりやすい。でも健康であるためにすること。元気を保つためになにかをする。これは軽視しがちだった。その健康状態を保つためになにかをするというのは、実際に効果を実感しにくいからだろう。健康を維持する。とても大切なことだ。もう二十代も後半だし、特に気をつけなくてはと思う今日この頃。

なにをするにも基本になる健康体。ちょっとずつではあっても自分で管理できるようになろう。病気になったら治すのではなく、病気にならないように過ごそう。普段から自分の体を大切にしていよう。栄養、睡眠、自己管理！

さあ、冬到来！大人も子どもも風の子だ！寒さに負けずに元気に乗り切ろう！

71 2005年をふり返る(ワケあり) 新藤 理 2005.12.14

まだ終わってはいないけど、2005年は「スタートの年」だったなあと思ってしまう。文部科学省からの実践委託を受けて様々なイベントを盛り上げることができた。学園全体が、「今年やれることはもう何でもトライしてみよう」という雰囲気にも包まれていたと思う。

中でも、(株)ニトリからの助成金交付に始まる、プラスアンサンプル部発足までの流れは、ちょっと自分の想いすら超えるスピードだった。とにかくこのチャンスを逃してはならぬ見切り発車とは言わないまでも、出足でコケる可能性は十分というスタートだった(恐ろしいことに、始めた張本人はあまりそう思っていなかったのだけど)。結果、12名もの部員に囲まれたスタートを切り、ついに14名になった部員達とともにコンサートまで開催する運びとなった。

新しいこと、やっぱり始めてみるもんだなと、始めてから思う。公私ともに充実した、この先につながる1年だった。

...なぜ今からそんなに 2005 年をまとめたがるのか。実は先日、ある人から「今年は大殺界のど真ん中だよ」と言われた。「大殺界」。最近流行りの細木某が得意とする「六星占術」で言うところの、「12年のうち3年分巡ってくる、恐ろしく悪い期間」のことらしく、曰く「運気がひたすら下降し、不幸に見舞われやすく、特にこの時期に結婚、就職、転職、引越し、出産、転校、事業を興す、お店を開く、家を建てる、マンションを買う、改名など、新しく事を始めるのはタブーとされている」そうだ。あれ？

さらに思い起こせば 2004 年、1月早々からアパートに引っ越し、念願の一人暮らしを始めた。高等部からは初めての卒業生が、フリースクールからは長い間在籍した生徒たちがいっぺんに卒業していく年ということもあり、自分なりに「総決算の年」というつもりで臨んでいた。その 2004 年は「大殺界の入り口」。いやはや。

多くは語るまい。今さらビビってどうする。少なくとも、「大殺界なのにこんなに新しいスタートの年にしちゃって、それでいてこうやって面白い結果が出てるんだから、大殺界が終わればいよいよすごい展開が待ってるぞ」という楽しみ方もできる。...やっぱり信用できないんだよなあ、占いて。朝のTVの「今日の運勢」だって、観た端から忘れていっちゃうもの。

ちなみに、六星占術上の分類でいくと、新藤理は「金星人」。曰く、「こよなく自由を求め、何ごとにつけ、合理主義にのっかって行動し」「行動的な性格が反映し、なんでも見てやろう、なんでもやってみようの精神で、好奇心も旺盛。思い立ったら即座に行動に移す尻の軽さが特徴」。そして、「古き伝統とか、迷信などというものもあまり信用しないのが金星人です」。

「当たってるねえ」と言われた。うーむ。

72 「伝えたいもの」 金澤拓紀 2005.12.15

前回のエッセイで少し触れた「夕張スクール」の閉校式の際に、生徒たちの中からバンドを結成しようという話が出た。中には全くの初心者から練習を始めた者もいたのだが、彼らを選んだ曲目はモンゴル 800 というバンドの「あなたに」。ご存じのない方もいらっしゃると思うので、どんな歌詞であったのかを一部紹介したい。

人にやさしくされた時 自分の小ささを知りました あなた疑う心恥じて 信じましょう心から
流れゆく日々その中で 変わりゆく物多すぎて 揺るがないものただ一つ あなたへの思い変わらない
泣かないで愛しい人よ 悩める喜び感じよう 気がつけば悩んだ倍 あなたを大切に思う

ストレートな歌詞だけに曲もシンプルだなあというのが私の印象であったが、自分が中学生時代に聞いていたザ・ブルーハーツの「トレイン - トレイン」を連想しながら、いつの時代にもその世代の若者たち（だけではないかも知れないが）に響くメッセージがあるんだなということを感じていた。

最近、細木数子氏の「六星占術」を取り上げているテレビ番組をよく見かける。単なる占い番組とは違い、芸能人や若者などを相手にお説教をする光景がお茶の間で受けているようなのだが、ものの言

い方にもう少し謙虚さがあればと思うこともある反面、話していることはごく「当たり前」のことであり、頷ける節も多い。

自分の中では「当たり前」だと思っていることであっても、人に伝える・理解してもらうとなると難しいことがよくあるのではないだろうか。制服を着た学生が堂々とタバコを吸いながら歩いていても、ヘタに注意をして逆恨みされたら困るし、ナイフでも出された日にはと考えると怖くて声も掛けられないといった手の話は決して珍しくはないだろう。

そこまで物騒な話ではないにしても、昔は悪いことをしたら近所のオジさん・オバさんに叱られながら育ったもんだけど、今は叱れる人が少なくなってしまったからと嘆いている方は多いように思う。叱れる人が少なくなってしまったというのも事実なのだろうが、たちとえ叱ることのできる人がいたとしても、叱られた方に「それがどうした」「ウザイ（うざったい）んだよ」という気持ちしか出てこなければ、「当たり前」のことを伝えるというのはなかなか容易なことではない。

伝える側と伝えられる側との距離関係や、受け取る側のタイミングといった要素で結果は大きく異なってくるのだろうが、「この人の言うことなら」というものによって心を大きく揺さぶられ、その結果、相手の言葉を素直に受け入れられるということが時としてあるのではないだろうか。

先ほどの歌詞の中に出てくる「自分の小ささを知る」というメッセージを自己否定でも押しつけでもなく謙虚な気持ちで受け止めることができるのは、歌という手段を通じて聞き手が歌手に共感し、自分の中にそのメッセージの意味を落とし込むことができるからであり、細木和子氏の場合も「六星占術」なる手段があるからこそ、たとえ話していることは「当たり前」のことであっても、他の人に言われるのとはまた違った受け止め方をされることがあるのではないかと思う。

相手との距離関係やタイミングを度外視してでも、「ダメなものはダメ」という言葉を発しなければならぬことが場合によってはあるかも知れないが、思慮分別のある相手に何かを伝えようとするのであれば、できる限り相手に受け止めてもらえるようなメッセージの投げ方を心がけようになりたい。時には「ストレートが一番」ということも頭の片隅に留め置きながら。

73 カディスの赤いいちご 芳賀 慈 2005.12.16

一人でスペインを少しゆっくり旅行したことがある。マドリードのマジョール広場で渡瀬恒彦がドラマの撮影をしていた。待ち人が遠くに現れたことに気づく、というようなカットだった。見物人が数十人遠くを取り囲み、私もその中の一人で、別にファンでもないのに「日本人つながり」と喜んでいった。

私はその後少しずつ南下を始め、やがてカディスという小さな港町に行き着いた。ジブラルタル海峡を渡るとアフリカ、という場所である。することはたくさんあった。ぼけ~っと海を見る、持ってきた本を熟読する、下手な風景画を描く。...有り余る時間のほとんどを、私は浜辺で過ごしていた。

あるとき、甘いものが食べたくなくて立ち寄ったお菓子屋さんで、ふと小さい頃からのささやかな夢を思い出し、実行することにした。直径20センチくらいのいちごクリームケーキを買い求め、宿に持ち帰ってスプーンを右手に丸ごとトライしたのである。ひと口目はしつこい甘さが快感だったが、半分を超えるとおいしくなくなり、3分の2ほどきたときにはかなりげんがりしていた。それでも「努力は報われる」というのか、「継続は力」というのか、どっちでもないような気がするがとにかく最

後まで食べた。

その後、いつものように海岸に向かった私は、宿と海岸の間くらいで緊急指令を受けることになる。おなかが痛くてどうにもならない。トイレを探すが見あたらない。あぶら汗が噴き出し、体も震えてくる。ええい、ここで！！ ...いや、それが東洋人の習慣だと誤解されたら国際問題になりかねない。少し離れたところに公園があったことを思い出し、私はお腹に振動が伝わらないように競歩のような早足でそのトイレを目指した。

入り口のトイレおばさん（利用者からコインを受け取りトイレットペーパーを渡す）が、一瞥もくれずに紙を寄越して、私はとりあえず事なきを得た。日本に帰ってきてから知ったことだが、渡瀬恒彦のドラマは「カディスの赤い星」だった。

74 体験授業 亀貝一義 2005.12.18

1960年に大学を卒えてから教職にあるから、何千回となく授業をしてきた（ほとんど社会科系）。教職というのはイコール授業といってもいいほどの意味がある。最近はこの授業が自分でいうのもなんだけれどけっこう楽しい。もちろん「どうも今日の授業は失敗だった」と思うこともある。そういう時はだいたい準備不足であったり、自分自身この内容について面白いと思わなかったことだ。

今日（17日）は主としてフリースクールの生徒でわが高等部に入ろうかと考えている中3対象の「体験授業」で、私も一こまを担当した。テーマは「歴史を変えた人間の飲み物は」といったことである。この種のテーマは、高校段階（中学校でも行われるが）ではよく行われるひとつである。お茶の話がこのポイント。

生徒たちの感想を聞く機会はなかったが、だいたい好印象をもってくれたのではないかと、思っている。

参加した10人ほどの生徒たちは、私も感動するほどよく『参加』してくれた。答えも、疑問をもったり時には笑ったりする表情もいきいきしていた。

今の学園の3学年どのクラスでも授業は楽しい。自分でも「いい授業」として文章にして他に紹介して自慢するようなものではないが、自分自身がやって楽しい、と思うのが一番なのだろう。それは生徒たちにとっても「まんざらでもない」という印象をもつ授業になっているのではないかと。

今日の体験授業に参加した生徒たちが高校1年になったときの授業もまた1時間1時間が楽しいと感じ取れるように準備したいと感じた今日であった。

75 「コスタリダ」 畑中紀世彦 2005.12.23

先日ニュースで防衛庁が防衛省になると報道されていた。以前から論議されている「憲法改正」については、着々とその計画が進行しているのだなあと考えさせられる。有事関連の時限立法が継続されたり、防衛庁が省に格上げになったり、国民は「いっそのこと憲法を変えたらいいんじゃない？」という気にさせられてしまう。憲法改正となれば最終的には国民投票。そのための政策としては当然なのかな。前回の総選挙では歴史的な大差で圧勝した与党、国民が選んで国の運営を委ねたその国会議員達が決めることなのだから納得しなければならないのだろうか。環境庁が省になったときとはわけが違う。防衛省にまで格上げするのって違憲じゃないのかなあ？ こう考えるのは、学生時代に旅をし

たコスタリカという国の影響が大きいかもしれない。

学生時代、私はアルバイトで稼いだお金を貯め、海外へ旅に出るのが楽しみのひとつだった。部活の合宿が定期的にあったせいもあり、なかなかお金は貯まらず数ヶ国にしか行けなかったが、次に行く外国をどこにしようか、行ったら何をしようか、と小金を貯めつつ思い耽っているのがまた楽しかった。大学卒業が近づいてきたとき、卒業研究もそっちのけで在籍していた環境農学研究室の恩師に、「中米を旅してきます。」と言い残して旅をした中米、そこで出会った国のひとつがコスタリカだった。

西は太平洋、東はカリブ海に面し、環境保護の先進国であるコスタリカは、1980年代に「永世積極的中立宣言」をした。政情不安な中米は武力衝突も多く、米国からの援助を受け続けてきた当時のコスタリカでは、米国に追従すべきか、平和を実現すべきか激しく議論された。そんな中で大統領に就任したアリアス大統領（ノーベル平和賞受賞）は、重火器を持つことも軍服を着ることも放棄した。軍隊も軍備もないので軍事費はゼロ。教育費に国家予算の3分の1を当て、教育に力を入れている。暴力で相手を打ち負かすのではなく、対話を信じ、協定と合意を信じ、コミュニケーションが何よりも大切だと子供たちにも教育をする。コスタリカの子供たちは、軍隊のない自国に誇りを持ち、「軍隊がなくても国は守れる。」という。

東京の私立中学教諭の古川ひろし先生が、以前こうおっしゃっていた。「アイヌの文化で『チャランケ』という慣習があり、議論を尽くして紛争を解決するというものだ。インディアンのある部族には、今ある問題を解決する方針を決めるとき、7代先の子孫にとって良いことかを考えて判断するという。こういう文化を今に生かせないものだろうか。今大事なものは論憲ではなく、憲法を活かし、憲法を育てる活憲であり、育憲なのだ。」...共鳴した。そうは思っている、生徒にものを教える立場にたったとき、自分の主観で教育をしてはいけないんじゃないか、国に反論するような教育をするってのは一組織の中にいてはいかなものかと考えてしまう。ううん、もどかしい。我が国よ、もうアメリカじゃなくてもいいんじゃない？ 防衛庁が省に格上げとなれば、そこにかかる予算も増加するだろう。ああ、もっと将来のために税金を使ってくれよ。コスタリカのように。

そんなふうに考えていると、いろいろ発展して考えてしまう。イラク戦争で我が国が米国に協力していなかったらこんなに灯油値が高騰しなかったんじゃないか、それでもう少し部屋が暖かかったら風邪もひかなかったんじゃないか、車のガソリンを満タンに入れても以前は5千円を超えなかったのに、身体も暖まって、懐も少しは暖まっていたら。などなど考えていたら不満は募るばかり。

あのコスタリカの旅が懐かしい。そこで宿泊していた宿「コスタリンダ」が懐かしい。宿の入り口でいつもニコニコと座っていた経営者らしきおばさんが懐かしい。名前はやっぱり「リンダ」っていうのかなあ。...んんっ？